憲法あれこれ 10 〈最終回〉

一橋大学名誉教授 浜林 正夫

平和憲法は未来をひらく アジアにとっても希望の光

小泉外交の行き詰まりを指摘する声が、与党の中からさえ上がっています。

小泉首相自身は「靖国問題という一つのことだけで中国や韓国が日本との対話を拒否しているのは理解できない」といって、まるで相手に非があるようなことを言っていますが、靖国問題というのは小泉外交の一つの象徴であって、問題の根はもっともっと深いところにあります。

根本的には「アメリカと仲良くしていればほかの国ともうまくいく」という基本姿勢が問題なのです。

しかし、それにしても、小泉首相がどうして靖国神社参拝にこだわるのか、私はよく理解できませんでした。日本遺族会の支持を受けるためとか、首相就任のときの公約だからとか、いろいろ言われますが、どうもそれだけではなさそうだということに、最近気づきました。

ある友人と話しているときに、たまたま靖国問題が出て、「中国や韓国は余計な口出しをする。ガツンとやってやればよいのに」と、その友人はいうのです。

私はあれは「余計な口出し」ではなく、日本の侵略戦争のことを考えれば当然の批判だと反論したのですが、そのときふっと気づいたのは「ガツンやればよい」という気分を国民の中に広げるために、わざわざ中国や韓国の嫌がることをしているのではないかということです。そうするとこれは憲法「改正」のムードづくりではないでしょうか。

この小泉外交には未来はありません。いま世界は大きく平和の方向へうごいていて、紛争は平和的な手段で解決するというのが常識になってきています。

アメリカがかつて世界中に張りめぐらした軍事条約の網の目はほとんど解体するか、あるいは機能しなくなってきており、立派に機能を果たしているのは日米安保条約ぐらいではないかと、私は思っているのですが、そう考えると、小泉首相とは逆に「アメリカと仲良くしていればほかの国とはうまくいかなくなる」と言えるのではないでしょうか。

隣国を「ガツンとやる」のではなく、平和的に共存していくことこそが未来をひらく道です。それは平和憲法のさししめす道に他なりません。

平和憲法は日本だけでなく、アジアの人々にとっても希望の光なのです。